

I. 導入

おはようございます。使徒パウロの証は、キリスト教史上もっとも説得力のある救いの証と言えるでしょう。迫害者サウロが使徒パウロになったいきさつをよく読んで考え、信仰に入ったという人は無数にいます。



ガラテヤの信徒への手紙の中で、パウロは昔の自分についてこのように語っています。(ガラテヤ 1:13-14)「1:13 あなたがたは、わたしがかつてユダヤ教徒としてどのようにふるまっていたかを聞いています。わたしは、徹底的に神の教会を迫害し、滅ぼそうとしていました。1:14 また、先祖からの伝承を守るのに人一倍熱心で、同胞の間では同じ年ごろの多くの方よりもユダヤ教に徹しようとしていました。」

これらの言葉は、タルソスのサウロと呼ばれていた時代の彼を正確に描いています。サウロは、教会の敵であり、イエスに従う者たちを憎んでいました。彼は、イエスを偽りのメシアだと思っていました。それで、イエスに従う者たちは捕えられて殺されるか投獄されるべきだと考えていました。サウロは博学で、精鋭された教師のもとで訓練を受けた人でした。そして、宗教界の出世街道をまっしぐらに進んでいるところでした。

しかし、ある日突然、サウロはその態度を一変させました。サウロはイエスを主として受け入れ、何もかも捧げたクリスチャンになり、教会の熱心な伝道者となりました。名をサウロからパウロへと改め、イエスの福音を宣べ伝えるために長旅をしました。このような変化はどのようにして起こったのでしょうか。迫害者サウロはどのようにして使徒パウロになったのでしょうか。



使徒言行録 9:1-19a にあるサウロの救いの話をともに読みましょう。

II. 聖書朗読 使徒言行録 9:1-19a, (新共同訳)

9:1 さて、サウロはなおも主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、 9:2 ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それは、この道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった。

9:3 ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。 9:4 サウロは地に倒れ、「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」と呼びかける声を聞いた。 9:5 「主よ、あなたはどなたですか」と言うと、答えがあった。「わたしは、あなたが迫害しているイエスである。 9:6 起きて町に入れ。そうすれば、あなたのなすべきことが知らされる。」

9:7 同行していた人たちは、声は聞こえても、だれの姿も見えないので、ものも言えず立っていた。 9:8 サウロは地面から起き上がって、目を開けたが、何も見えなかった。人々は彼の手を引いてダマスコに連れて行った。 9:9 サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった。

9:10 ところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼

びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。 9:11 すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。 9:12 アナニアという人が入って来て自分の上に手を置き、元どおり目が見えるようにしてくれるのを、幻で見たのだ。」 9:13 しかし、アナニアは答えた。「主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。 9:14 ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。」 9:15 すると、主は言われた。「行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。 9:16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはいらないかを、わたしは彼に示そう。」

9:17 そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」 9:18 すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、 9:19 食事をして元気を取り戻した。

III. 教え

サウロがエルサレムからダマスコへ向かう途上で、主イエスが突如として天からの光の中にあられました。**使徒 9:3「ところが、サウロが旅をしてダマスコに近づいたとき、突然、天からの光が彼の周りを照らした。」**ルーベンスは、その場面をこのように描いています。細かい部分はルーベンス自身の想像によるもので、おそらく実際の情景とは違っているでしょう。しかし、当時の劇的なできごとをうまく捉えていると思います。イエスが天使たちを伴い、光に包まれて天から地上を見下ろしておられます。サウロは仰向けに倒れて上を見上げています。馬が暴れて、周りの人々が馬をなだめようと必死になっています。



使徒 9:4-5「9:4 サウロは地に倒れ、『サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか』と呼びかける声を聞いた。 9:5 『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、答えがあった。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』サウロはイエスに従う者たちを迫害していました。しかし、イエスはサウロに「**なぜ、わたしを迫害するのか**」とお尋ねになりました。これは信仰のために迫害を受けるすべてのクリスチャンにとって大きな励ましです。イエスを信じていることで、迫害を受けたり、馬鹿にされたり、不当な扱いを受けたりするとき、その敵意の本当の矛先は私たちではありません。主イエスです。霊的には、クリスチャンに対する敵意はイエスに対する敵意なのです。

私たちがあざけったり迫害したりする人たちに、私たちが反応する必要はありません。なぜなら、その人たちは私たちにではなくイエスに対抗しているからです。ですから、イエスご自身が対処してください。「**あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。**」と**コリント第一 12:27**に書かれているとおり、キリスト・イエスはご自身の教会である私たちのうちに聖霊として住まわれます。そして、私たちは全体で、この世におけるキリストの体を成しています。私たちが迫害されるなら、イエスが迫害されます。私たちが苦しめば、主が苦しめられます。そういうわけで、私たちが苦難に遭う時もけっしてひとりではありません。どんな苦しみや悲しみも、イエスがいつもともにしてください。主のご臨在があるので、私たちはすべてを御手にゆだね、迫害されても平安と喜びに満たされることができます。



サウロは使徒パウロになる人です。ですから、この話を読むとき、どうしてもサウロに注目しがちです。しかし、私たちの多くはアナニアに共感するところが多いのではないのでしょうか。アナニアは良い人でしたが、無名で、その人生についての記録は歴史に残されていません。しかしこの時、主はアナニアに語りかけ、とても重要な役割を託されました。使徒 9:10-11 「9:10 とところで、ダマスコにアナニアという弟子がいた。幻の中で主が、「アナニア」と呼びかけると、アナニアは、「主よ、ここにおります」と言った。9:11 すると、主は言われた。「立って、『直線通り』と呼ばれる通りへ行き、ユダの家にいるサウロという名の、タルソス出身の者を訪ねよ。今、彼は祈っている。」(写真:直線通りの商店)



アナニアはためらいました。迫害者サウロに会いに行きたいとは思えません。使徒 9:13-14, 「9:13 しかし、アナニアは答えた。『主よ、わたしは、その人がエルサレムで、あなたの聖なる者たちに対してどんな悪事を働いたか、大勢の人から聞きました。9:14 ここでも、御名を呼び求める人をすべて捕らえるため、祭司長たちから権限を受けています。』」主に向かって状況を説明しようとするとは、アナニアは恐れあまり、主がすべてをご存じであることをうっかり忘れてしまったのでしょうか。それとも、時間かせぎをしていたのでしょうか。

どちらにせよ、アナニアは仕えるように召されて、「はい、主よ」と即答しませんでした。実際に出かけるまで、二度行くように言われなければなりません。私たちはどうでしょう。そのようなことが私たちにも起こったことはありませんか。私たちが従うまで、主が同じことを繰り返し語らなければならなかったことはないのでしょうか。ためらったり、時間稼ぎをしたり、主に向かって状況を説明しようとしたことはないのでしょうか。なぜそんなことをするのでしょう。イエスを主と呼ぶなら、そして、そのお方が語られたのなら、なぜすぐに従えないのでしょうか。主が語られたのかどうか確信がないときや、みこころがわからないときのことを言っているのではありません。そうではなく、主が私たちに望んでおられることがはっきりわかっているが、それを実行に移さないときのことです。私もそういう経験があります。誰にもそういう体験があると思います。

私たちは信仰において成長し、主をさらに信頼できるようになる必要があります。イエスは主であり、私たちは主の民です。主の御声を聞いていつでも「はい、主よ」と言えるようになるのは、私たちにとって良いことです。主のみこころに対して、主の方法に対して、主のタイミングに対して、「はい」と言うのです。



アナニアは二度語られなければなりません。私たちにも身に覚えがあると思います。最初から「はい、主よ」と言っておいたほうがよいのです。感謝なことに、主はご自身の民に恵みと忍耐を示してくださるお方です。主はアナニアに再びおっしゃいました。そして今度は、もう少し説明も付け加えられました。『行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である。9:16 わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。』パウロは異邦人のための使徒であると思われがちです。そして、もちろんパウロの働き的大部分は異邦人に宣教することでした。しかしここで、主がパウロをイスラエルの民のためにも召されたことがわかります。

パウロは多くの苦難を耐えました。宣教中に、殴られ、鞭打たれ、投獄され、石打ちに遭い、難破も経験しました。飢えと寒さに悩まされることもありました。友人や同労者たちから見放されることもありました。しかし、主はいつもパウロとともにおられました。そしてここでわかることは、パウロの苦しみも主のご計画の一部だったということです。主はおっしゃいました。「わたしの名のためにどんなに苦しまなくてはならないかを、わたしは彼に示そう。」私たちにはなかなか理解できないことですが、苦しみも神のご計画の一部であることがあります。苦しみによって、

私たちはキリストに似た者とされることがあります。また、信仰のために苦しむことをいとわないことを人々が見れば、私たちの証が説得力のあるものとなります。ですから、苦しみが必ずしも悪いものではないことを認めなければなりません。苦しみが必要な場合もあるのです。

アナニアの話に戻しましょう。アナニアは、直線通りの家に送られました。ダマスコにある直線通りに行くと、アナニアがサウロに会いに行った家だとされるチャペルがあります。私もいつかそのチャペルに行ってみたいと思っています。非常に穏やかで祈るのに適した場所のように見えます。アナニアがサウロを訪ねたのが本当にこの家だったかどうかはわかりませんが、ずいぶん古い建物ですし、石造建築なら修理を重ねて長年持ちこたえることも可能でしょう。しかし、建て替えがされていたにしても、この場所にその家があったというのは十分あり得ます。



使徒 9:17 「そこで、アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。『兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。』」ピエトロ・ダ・コルトーナは、その場面をこのように描いています。この絵では、町の様子はダマスコというよりまるでパリですが、ここでパウロが 30 歳くらいの若者として描かれているのは良い点です。多くの画家は、使徒パウロを老人のように描きます。働きの最後のほうならそれは正しいのですが、ここではサウロはまだパウロとして働きを始めていないわけですから、まだ若かったはずで



使徒 9:18-19a 「**9:18** すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起こして洗礼を受け、**9:19** 食事をして元気を取り戻した。」サウロの名がパウロに変わったことは、使徒 13 章までまったく触れられていません。しかし、ここですでにサウロが変えられた人であることは明らかです。サウロはダマスコへの途上でイエスに出会いました。その後は、今までのサウロではありませんでした。彼は新しい人となりました。イエスに従う人として生まれ変わったのです。

サウロは、歴史上もっとも偉大な伝道者パウロになりました。数多くの人々をイエスへと直接導き、彼が教会に宛てて書いた手紙の数々は、新約聖書の約半分を占めます。しかし、そのような偉業は自分の力で成したのではなく、神のおかげだということを、彼はよくわかっていました。コリント第一 **15:9-10** で、パウロはこう語ります。「**15:9** わたしは、神の教会を迫害したのですから、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打ちのない者です。**15:10** 神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にならず、わたしは他のすべての使徒よりずっと多く働きました。しかし、働いたのは、実はわたしではなく、わたしと共にある神の恵みなのです。」

パウロの働きは大きな働きでした。アナニアの働きはそれに比べて小さなものでした。しかし、私たちがどんな者であれ、また、その功績がどんなものであれ、それは神の恵みによるものです。私たちは、主の栄光のために働くという特権にあずかっています。しかし、それはすべて神の恵みによるのです。これは、私たちが覚えておくべき教訓です。「**神の恵みによって今日のわたしがあるのです。そして、わたしに与えられた神の恵みは無駄にな**りません。すべては神の恵みによるもので、主の恵みなしでは私たちはどうしようもない者です。主の恵みがあるからこそ、私たちは神の役に立つしもべとなれるのです。」

ダマスコへの途上で起こったサウロの救いの話が私にとって大きな意味を持つようになった話をお分かちしたいと思います。私はクリスチャンになって数年、イエスが**マタイ 7:13-14**でおっしゃった言葉をなかなか呑みこめずにいました。**マタイ 7:13-14**「**7:13** 狭い門から入りなさい。

滅びに通じる門は広く、その道も広々として、そこから入る者が多い。 7:14 しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない。」

ここで主イエスが言おうとなさっている主要なポイントは、長い物に巻かれて楽な方向へ流されているなら、それは間違った方向だということでしょう。そして、ヨハネ 10:9 で、イエスはご自身が命に至る門であると示しておられます。ですから、狭い門の教えは、救いに至る唯一の道はイエス・キリストをとおしてであることを強調しています。イエスがこの世に来てくださった神であり、この世の罪のために十字架にかかるために来てくださったということを理解した時点で、イエスが救いへの唯一の道であることを受け入れるのは容易いことでした。しかし、なかなか私が飲み込めないと感じた箇所は最後の部分です。命に至る道について書かれた部分で、「それを見いだす者は少ない。」とあります。

この聖書箇所ので、少数の人間しか救われないと信じているクリスチャンも少なくありません。しかし、他の聖書箇所では、たくさんの人々が救われると記されています。黙示録 7:9-10 「7:9 この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、 7:10 大声でこう叫んだ。『救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、／小羊とのものである。』」

では、救いに至る狭い門を見つける人が少ないのなら、どうやって数えきれないほどの大群衆が天国に行けるのでしょうか。これが矛盾していると思えて、納得できませんでした。大群衆が救われて、天国が満員になることを喜びたい反面、狭い門の教えがイエスを見出して救われる人は少ないと警告しているようで気になりました。けれども、マタイ 7:13-14 は、救いの道は狭い門で「それを見いだす者は少ない。」と言っているのです。

救いへと導く門はイエスだと私たちは知っています。ヨハネ 10:7-9 にはこうあります。「10:7 イエスはまた言われた。『はっきり言っておく。わたしは羊の門である。 10:8 わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。 10:9 わたしは門である。わたしを通して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。』」



この箇所では、イエスは当時の人々にわかりやすい例えを用いて、救いに至る唯一の道はイエスご自身であることを教えられました。古代イスラエルでは、夜になると羊は狭い門のある囲いの中で座るか横になって寝ました。羊が囲いの外に出たり、狼が囲いの中に入ったりしないためです。

イエスは、このイメージを用いて、ご自身を門と呼ばれました。しかし、ここで門は羊飼いであります。イエスは、見出す者の少ない狭い門です。そうなら、どうやって大群衆が救われるのでしょうか。私は不思議に思っていました。そしてある日、サウロの話を読んで気付きました。サウロがイエスを見つけたのではない、イエスがサウロを見つけてくださったのだと。

狭い門であるイエスを見出す人はあまりいません。ほとんどの場合、イエスが私たちを見出してくださるのです。私も、自分から救い主を探し求めてイエスを見つけたのではありません。このことを考えると、狭い門の教えが違った意味を持つようになります。狭い門だから救われる人が少ないということではなく、主がご自身の羊を探し求めて見出し、天国へと連れ帰ってくださることを信頼する必要があるということです。イエスを見出す人は少ないですが、イエスに見出される人はたくさんいるのです。

IV. 結び

群れから迷い出た羊が、自分から羊飼いを探して見つけることは稀です。救い主を探し求めてイエスにたどり着いたと心から言えるクリスチャンも少数派ではないかと思えます。どちらかという、私たちの多くは、イエスが私たちを見出してくださるまで、救い主を求めてもいなかったのではないのでしょうか。主が偉大な羊飼いで、失われた羊を見出してくださるお方であることを感謝します。



サウロはイエスを探してはいませんでした。むしろ、捕えて投獄するという目的で、クリスチャンを探していました。サウロが自分自身で命に至る狭い門を見出すことはなかったでしょう。しかし、偉大な羊飼いであるイエスがサウロを見出してくださいました。

私たちは神の失われた羊です。私たちは真理を離れ、あらゆる罪の中をさまよひ、天の父から遠く離れました。しかし、イエスが来て、私たちを見出してくださいました。イエスは私たちを抱き上げ、傷の手当をし、肩に担いで家に連れて帰ってくださいます。天国は、イエスが連れ帰ってくださった人々でいっぱいになるでしょう。

では祈りましょう。

V. 祈り